

「のざきまいり」に見る庶民参詣の娯楽性

Amusement of the common people temple visit in NOZAKI MAIRI

新 矢 昌 昭

要 旨

「のざきまいり」の一つの特色は、宗教性よりも娯楽性が顕著なことであり、元禄期より環境の変化にもかかわらず娯楽性が継続し人々に受容されていることである。では、何故この娯楽性が継続し受容されてきたのだろうか。ここでは、近世から現在までの野崎まいりを概観し、この要因を特に人々の娯楽的な欲求から考察する。

キーワード：野崎観音、「のざきまいり」、娯楽性、流行。

はじめに

本稿の目的は、生駒山地の麓大阪府大東市に位置する（図1）野崎観音（慈眼寺）の年中行事である「のざきまいり」¹⁾に焦点を当て、庶民参詣の特質を考察することにある。

「のざきまいり」で特徴的なのは、娯楽性、そして流行の波の繰り返しである。この娯楽性は「のざきまいり」が始まって以来、人々に「楽しい」イメージとして語られている。特に昭和初期、東海林太郎の「野崎小唄」の爆発的なヒットにより、野崎観音の名は全国的な広がりを見せた。現在でも「のざきまいり」、野崎観音の名は年配の人々から東海林太郎の「野崎小唄」とのセットで耳にすることができる。野崎観音の娯楽性の特色は、庶民の娯楽に取り入れられることによって流行が繰り返し生み出されたことにある。だが娯楽と言っても「のざきまいり」は、宗教行事であるから庶民の宗教的な要求にも応えるものであった。この庶民の宗教的な要求とは近世期の大都市における縁日・開帳、更には、縁日・開帳に結びついた様々な

ご利益が期待され、神々が盛んになった現世利益の側面と関連している。しかしこの開帳・縁日こそは現世利益や娯楽性を同時に伴うものであった。開帳・縁日はその周囲に見世物や出し物がでるように娯楽性と結びついていくからである。従って、「のざきまいり」も近世期の開帳・縁日と同じく、開帳・縁日の現世利益に旅や浄瑠璃など庶民の娯楽と結びつくことで流行の波の繰り返しを生んだのである。では、これらの結びつきによる流行の繰り返しはどのようにして展開し、また現在に至っているのだろうか。特に近世期と近代期（昭和初期）の「のざきまいり」の娯楽性と流行性の繰り返しの側面について様々な側面から考察し、更に現在での「のざきまいり」のあり方を考察したい。

1 「のざきまいり」と近世仏教

「のざきまいり」とは、寺のパンフレットによると5月1日から5月10日（旧暦は、4月1日から8日まで）に開催される「元禄時代より当寺に伝わるお祭で、正しくは無縁経法要といひ、有縁無縁のすべてのものに感謝のお経をさ

さげる行事」である。参道では露天商が多く並び、また商店街や境内でイベントが催されている。そして東海林太郎の「野崎小唄」が駅前の参道から境内に流れるなかを多くの人々が押し寄せる。

「のぎきまいり」は都市的な神仏の流行現象の一つであると言える。何故なら、共同体の規制が少なく個人的な現世利益と娯楽を求める大坂都市庶民の間で発生したからである。宮田登によると、神仏の流行とは、第一に民衆が熱狂に信仰する神仏であり、発生と消滅がある。第二に「空間的＝社会的な広がり」と「時間的＝歴史的な流れ」の軸で展開する。第三に一時的な時間内で終われば風俗現象であるが、次の時代に流行神仏が引き継がれると習俗化（民俗化）することにある（宮田 1993：25）。こうした神仏の流行の発生については、次のような側面が考えられる。例えば、病気が治癒したなどのご利益で自然発生的に起こる「庶民によるもの」。そして祈祷、縁日・開帳を軸としつつも、庶民の宗教的、娯乐的欲求に応えると流行する「社寺によるもの」である。ここでは、以下に見るように「のぎきまいり」が「社寺によるもの」と考えられるので、これに注目して検討していく。

「社寺によるもの」は、江戸期の宗教の状況から考えなければならない。ここでは仏教に限定するが、まず仏教と人々の関係を見ると人々はいずれかの寺を旦那寺として関係を持たねばならなかった寺壇制（旦那制度）によって、固定されていたことに注目する必要がある。この結果、近世仏教が「葬式仏教」化してしまうことになり、また「葬式仏教」化は庶民の後世問題を解決したが、人々の日常的な宗教心を満たすものではなく、現世利益への欲望を活発にしたとも言える。つまり「（江戸期の）寺院は、檀家のための菩提寺という性格をもつとともに、不特定の庶民の現世利益のための祈祷寺という性格をもっており、縁日や開帳は、後者の側面

を發展させた」²⁾のである（安丸 1986：28）。ここでは、この現世利益を宮家準に従い、「人間が超自然的な存在との関係を通して、日常生活上の諸問題に関する直接のおかげを得ること」（宮家 1980：131）としたい。そしてその内容を宮田登に従い、祈願であるが、祈願は現世の人間生活が順調な場合には維持の方向を持ち、日常生活に挫折が生じた場合には回復の方向を持つことであるとする（宮田 1977：123）。つまり、超越的な存在に対して日常生活を好転、あるいは維持、發展させることが現世利益と言えるだろう。

このように全体として近世仏教は葬式仏教の側面と現世利益を叶える祈祷寺としての側面を持っていたのである。しかし、より注目したいのは寺院の一部が祈祷だけではなく、現世利益としての縁日・開帳をより全面的に出していくことである。寺院によっては人々の要求に応えるだけではなく、縁日や開帳を寺院が積極的に実施しなければならない事情が存在したのである。それは特に元禄11年（1689）の法令「寺院古跡新地之定書」の影響が大きいと思われる。この法令は、寛永8年（1631）までに建てられた寺院を古跡とし、それ以降のものを新地と規定したもので寺院経営に影響を与えるものであった。結果、古跡寺院は本山の支配下に置かれ幕府から保護を受けたが、新地寺院は寺領の拝領もなく本山も持たない場合もあったのである（圭室 1977：167）。従って、経営基盤が確固としていない中小寺院が、主にこの縁日・開帳を行うことになる³⁾。もともと縁日とは、その日に限り特定の仏縁にあずかれる日であり、また開帳とは普段、秘仏である本尊を庶民の前に出現させ靈験を強調することであり、両者とも宗教的な行事であった。しかし、そうした性格を変え娯乐的な側面を多く持つていくことに注目する必要がある。以下、「のぎきまいり」は開帳で有名であったので、開帳を中心に取り上げ

る。

近世の開帳は次第に庶民の娯楽の要素が凌ぐようになる。「参詣人や見物人の寄付・賽銭をできるだけ多く得ることを目的とするようになり、そのため人を多く集めるための見世物・出し物を同時に開くようになったのである。寄付や賽銭は、(中略)寺社の修造費・建築費を得るために集められ、開帳はその手段でもあったが、その側面がさらに強調されることとなったのである」(渡邊 1993: 79-80)。更には、鴻池義一が指摘するように娯楽性により開帳の成功・不成功も決まるようになる。「すでに開帳が庶民の好みを無視しては成立し得なくなっていた」のである(鴻池 1987: 39)⁴⁾。従って、社寺による開帳が流行すると社寺の行事が娯楽の対象になり、現世利益が開帳の娯楽性と結びいたと言えるだろう。一方で、この娯楽性は仏教がより庶民側へ近づくことを表しているが、開帳を行う寺がより庶民の宗教的、娯楽的欲求を汲み取らねばならなくなったとも言える。このように「社寺によるもの」には、庶民の宗教的欲求である現世利益とより娯楽性を社寺側が満たす必要があったのである。そして、このような近世仏教のあり方が野崎観音に影響していたと考えられる。

「のぎきまいり」は第一世の青巖(崑)和尚の頃に始まったが、特に第四世の嶺南和尚、第五世大真和尚は積極的にこうした庶民の欲求を捉えたと思われる。野崎参りがはじまると、大真和尚は寺運興隆のために積極的に参詣客誘致にのり出した。景色も気候も一番よい4月の1日から灌仏の日の8日まで、無縁経の法要を営み、25年に一度の開扉ときめられた秘仏の十一面観音も特別に開扉する。しかもそうした御開帳の立札を大坂町中のあちこちに立て市民に宣伝したのであった(大東市史 1973: 395)。

このように積極的な開帳に乗り出したのは、戦国期に戦乱に会った野崎観音が再建途上にあったことと「新寺」とされたからだと思われる。

恐らく野崎観音が「新寺」の扱いをされたのは、「寺院古跡新地之定書」が幕府からだされた時、寺領が見当たらないこと、本末関係が緩やかであったこと⁵⁾に求められると思われる。「新寺」となったからには再建途中にある野崎観音の経済的な基盤を自ら築かねばならない。しかし野崎観音は檀家が少ない寺であった⁶⁾。また特に野崎観音の経済状況に影響を及ぼしたのが、大和郡山藩本多氏の転封である。前住職、尾瀧一峰和尚の談話から本多氏と野崎観音の関係が伺うことができる。

阿波に徳川四天王の一人である本多家の城がありましてね、千姫が本多の三男定時に惚れ、三万石をもらって郡山へ来たんです。そのとき、阿波の東長寺からお母さんの位牌をもってきて、郡山へ同じ名の東長寺を建てたんです。その東長寺の和尚^{いつかん}一竿がうちのお寺へ住職になって来たわけです。(中略)本多さんから禄を二百二十何石もらってて、本多家の位牌もありますし、郡山から野崎参りの頃になるといつもやって来てたようです(まんだ編 1978: 4)⁷⁾。

この本多家とは、本多忠勝の孫本多忠朝の次男、政勝(1606頃～1671)のことである。政勝から二代後の忠国が、延宝7年(1679)陸奥国福島に転封するまで、本多家は大和郡山の藩主であった。そして、和尚の言う禄は河内国讃良郡野崎村に約276石の領地があった(『寛文印知集』⁸⁾)ことを指しており、本多氏の大和郡山にある菩提寺と本末関係を結んでいたのことから帰依を受けていたと思われる。しかし本多氏の転封に伴いこれ以降郡山藩との宗教的、経済的な関係はなくなった⁹⁾。この結果、寺院経営と再建のため積極的に野崎観音は開帳を宣伝したと思われる。

開帳は庶民の現世利益と娯楽性に応えなければならない。「のぎきまいり」はこの側面を大いに持っており、庶民の要求に応え流行したと言える。もちろん、大坂では野崎観音だけがこ

のような側面を持っていたのではない。大坂市域でも、例えば四天王寺の縁日・開帳は特に盛んであった。では、大坂郊外の野崎観音が何ゆえに流行したのであろうか。何故、野崎観音でなければならないのだろうか。

2 「のざきまいり」の近世

「のざきまいり」が近世に流行したのは、次のような側面であると考えられる。第一に、旅の流行。第二に大和川の付け替えによる「のざきまいり」の定着化。そして第三に浄瑠璃で扱われたことである。

江戸時代は、元禄頃から全国的に旅が流行し始める。旅の代表的なものは伊勢参りである。しかし多くの人々にとって遠方への旅は、費用がかさむため一生に一回であり気軽なものではなかった。そこで都市庶民の気軽な旅だったのが都市近郊の旅である。江戸では江ノ島、成田山などに庶民が押し寄せ、大坂では信貴山、生駒宝山寺、中山寺などに庶民が押し寄せた。これらの地に共通しているのは江戸時代での旅が民間信仰と結びついていたことである。しかし、江戸後期になるにしたがって信仰よりもいっそう娯乐的な要素が濃くなる。寺社参詣という信仰を目的とした従来の旅も存在したが、江戸後期における寺社参詣の旅は、その大部分が物見遊山的な要素をもつのである（池上 2002：10）。つまり、旅に伴う参詣は信仰と娯楽がセットだったのである。

大坂庶民の旅を可能にしたのが大坂の都市経済の発達である。大坂は「天下の台所」と呼ばれたように、全国市場の中核として発展した。大坂は加工工業が盛んであり、実質は商人の町よりも職人の町と呼ぶ方が相応しかった。この職人を形成している人々が庶民であったと言える。そして大坂の繁栄は、都市ならびに近郊で暮らす庶民に恩恵にもたらすようになった。結果、浄瑠璃や歌舞伎は庶民の娯楽として強まっ

たように、余暇も生じたのである。「余暇を取れるようになると、芝居だけでなく行楽もまた可能になってくる。だが忙しい庶民にとっては、まず日帰りぐらいしかできない。石切や生駒の聖天、それに志貴山などがあるが、山路をさけるなら石切、しかも船を使えばほとんど歩かずに行けるのが、この野崎観音であった」（大東市史 1973：395）。野崎観音は、こうして気軽な旅という要素が加わるのである。

また、この旅を可能にしたのは交通網の整備であった。特に大和川の付け替えが大きい。付け替えは宝永元年（1704）（図2）であるが、これ以降「のざきまいり」は娯楽化が強くなり定着していく。付け替えの結果、深野池と新開池が埋め立てられ新田ができ、その中に徳庵井路ができ野崎観音に近い井路を「観音井路と称して参詣用の船の通路ともなり、着船場も観音浜とも呼ばれた。また陸路を歩む者は、観音井路の堤を直行したから、かつて池辺を廻ったよりも近くなった」のである（大東市史 1973：395）。また、徳庵堤から観音浜までは陸路、水路が平行していたことから名物となる「ふり売りげんか」という娯楽が加わった。徳庵堤から観音浜まで陸路をとる者とずっと口喧嘩が絶えなかったであろう。『河内名所図会』に「春は無縁経とて桜花匂ふ頃、秋は紅葉して山々錦なるふし、浪花津の老少、ここに群じ、あるは川舟に棹さして、道ゆく人と言葉戦ひして、詣する輩多し。是を野崎参と云」とあるように、「ふり売りげんか」は「のざきまいり」とセットで捉えられていた。

また「ふり売りげんか」は、落語「のざきまいり」の題材になっている。何時頃から流行したのかわからないが、陸路と水路の地理的關係から自然発生し定着したと思われる。大坂の年中行事を記した寛政6年（1794）の『虚實柳巷方言』に「四月 朔日 二日より八日迄、野崎参りのふり賣喧嘩、（中略）一興なるぞかし」とあるので、この頃には知られていたと思われ

る。

野崎観音は、近松門左衛門、近松半二によって庶民の娯楽である浄瑠璃の題材として取り上げられることになる。近松門左衛門の『女殺油地獄』（享保六年＝1721 七月初演）では野崎観音は以下のように取り上げられている。

今年は野崎村の観音薩捶の御開帳。桜もすぎたわびしい山里に、おとずれる人もないはずを、あとからあとから老若男女が、遊山がてらのだて参り（中略）。野崎観音堂に参詣する舟の着く一ツ橋も、ほど近くにある。舟路にもせよ、徒歩路にせもせよ、ここに集まる人々は、慈眼衆生を視たもう観世音の慈悲を慕ってくる。彼らは、それぞれ御堂に参って、扇をひらいて前に置き、これに仏を勧請して礼拝しながら、念誦をくり返すのである。

ここから伺うことができるのは、「のざきまいり」は「御開帳」に「遊山がてらのだて参り」として「わびしい山里」に来ることである。またここで注目すべきは観音への信仰が描かれていることであり、現世利益と旅の娯楽が結びついていることである。この情景は庶民の娯楽であった浄瑠璃を通じて現世利益の場として野崎観音をPRすることになったと考えられる。

半二の浄瑠璃『新版歌祭文』（安永九年＝1780年初演）は、東横堀瓦屋橋西詰の油屋太兵衛の娘、お染と丁稚久松が心中した事件が主題となっている。お染め・久松の心中を扱った浄瑠璃は、半二以前でも歌舞伎『心中鬼門角』（宝永7年正月初演、作者不詳）、浄瑠璃『おそめ久松袂の白しぼり』（正徳元年初演、作者紀海音）などの作品があるが、半二の『新版歌祭文』は現在でも演じられているのでお染・久松の心中ものの完成体とみなすことができる。この作品は四場からなるが、その内の一つが「野崎村の段」である。「野崎村の段」は、久松が油屋へ見習いに行っていた油屋の娘のお染めと恋仲になるが、ある日大金の使い込みの濡れ衣を着せ

られ、濡れ衣を着せた相手とともに野崎村に帰り、父久作にお金を肩代わりしてもらう。その後を追ってお染が野崎村の久松に会いに来るが、その時久松は後妻の子であるお光と祝言を挙げさせようとしていた。お光は二人の中を察し、自らが尼の姿になって身を引く、というのがこの段の大まかなあらすじである。ところで、野崎村へお染が会いに来る描写は次のように語られている。「切っても切れぬ恋衣や、元の白地をなままかに、お染は思い久松があとを慕うて野崎村、堤伝いにようようと、梅を目当てに軒のつま」。「なんぼうでも得切らぬ、あんまり逢いたさ、なつかしさ、もったいないことながら、観音さまにかこつけて、逢いに来たやら南なら」。

この半二の作品は近松門左衛門とは違って、「のざきまいり」がどのように行われていたかについての描写はなく、また観音への信仰も触れられていない。しかし、現在でも近松門左衛門ではなく野崎観音はお染・久松と結びついて語られている。恐らく半二は、「『お染久松』の物語ができて、その舞台となった野崎が有名になったのではなく、野崎参りが盛んになったので、世に知られた野崎をドラマの舞台に選んだ」のである（大東市史 1973：405）。つまり、半二は野崎観音が賑わっていた舞台として野崎村を選んだわけであるが、この賑わいが物語を成功させることになった。こうして「のざきまいり」はよりPRがされていったのである。なお、お染久松の塚が現在も境内の一角にある。

このように大和川の付け替えにより、「のざきまいり」が流行し始めたのであった。つまり、経済的な発展によって生活上余裕ができた庶民の気軽な旅への要求と大坂から野崎観音の地理的な距離、庶民の現世利益の欲求と野崎観音の開帳、そして大和川の付け替えによる交通の整備と、それに伴って出現した「ふり売りげんか」などの娯楽性が重なり合い、更には庶民の娯楽である浄瑠璃がPR効果を生み「のざきまいり」を流行させたていったのである。開帳が娯楽化

していくことは、近世期の他の寺院と野崎観音も同様であった。それは、近松門左衛門と近松半二に見られる野崎観音の情景には大きな違い、すなわち現世利益よりもより娯楽性が強くなっていったこと、そして「ふり売りげんか」が生まれたことからわかる。このように「元来は観音仏への熱烈な信仰と結びついていたのである」野崎参りは、昭和初期の歌謡曲『野崎小唄』に表現されえるような呑気な物見遊山的な気分と、すでにそのころから結びついていったのである（森下 1985：18）。

しかしだからと言って、庶民の宗教的欲求が薄れたのではなく、娯楽的な要素が強くなっただけでである。都市の生活に生きる庶民は大坂が経済的に発展したと言っても、庶民全体がその恩恵に浴するものではなかった。それは大坂が町人の町と言いつつも実際の「町人」、すなわち「家持」の「町人」¹⁰は10パーセント位しかいなかったのである（渡邊 1993：16-7）。つまり、「町人」以外の人々である「借家人」は生活に対して不安を生じさせていたのである。何故なら「借家人は大半が職人かまたは零細な製造販売業者であった」からである（新修大阪市史 1989：532）。庶民は、日常的な不安を一時的にせよ忘れることができる非日常の世界を神仏の靈験のある気軽な旅に求めたのであろう。一見、華やかな庶民達の娯楽は心性から見ると不安があるとも言える。流行神の影響や行楽地が庶民信仰と結びついていたのは、こうした側面があったと思われる。

3 落語「のざきまいり」と 東海林太郎「野崎小唄」

「のざきまいり」は、明治に入ると一つの大きな変化を迎える。それは鉄道の開設である。現在鉄道は、京橋から木津を結ぶ JR 学研都市線（旧片町線）である。明治28年に開通した鉄道会社は私鉄浪花鉄道であった。野崎には駅が

なかったが、会社は用地を買収して5月1日より10日間、野崎仮停車場を設けて臨時停車していた（大東市史 1980：399）。2年後浪花鉄道は、名古屋と大阪を結ぶ目的のあった私鉄関西鉄道に吸収合併された。当時の関西鉄道の新聞広告には、「五月一日より十日迄 懐車賃大割引 野崎観音と観音と生駒詣り 門前假驛設置 臨時懐車増發」（『大阪時事新報』、明治39年5月5日）とあり¹¹、また野崎観音は、「宇治の新緑」「大和めぐり」とともに「御遊覧の最良地」としても紹介されている（『大阪時事新報』、明治38年4月30日）。関西鉄道はその後、明治40年に鉄道国有法によって国鉄（帝国鉄道）となり、ようやく明治45年4月から野崎は常設駅となった。この鉄道の開設による利便性故に、更に参拝者が増えることになったが、しかし同時に「例年桜花の時と楓葉の節との二期を以つて無縁経を修し賽者群集肩摩して立錫の地を餘さず、昔は浪華の老若にして寺に賽するもの一は舟にて寝屋川を遡り一は陸路を取り両者互に罵詈嘲弄するを以て例とし称して野崎参りといひしが、今は多く汽車に依り此の事廢れき」（大阪府編 1903：946）と、舟での「のざきまいり」が失われてしまった¹²。従って、落語「のざきまいり」は鉄道が開通するまでの貴重な「のざきまいり」の情景を伝えていることになる。

この落語は、桂春團治の「お家芸」と言われている。何時落語として成立したのかはわからないが、初代桂春團治の生年没が明治11年（1878）～昭和9年（1934）なので、落語「のざきまいり」は明治期には成立していたと考えられる。鉄道が開通することでこの情景は失われることになるが、庶民の娯楽である落語を通して「のざきまいり」は、娯楽・物見遊山的な気分を人々に伝えたと思われ、流行の波につながったと思われる。

この「のざきまいり」は、徳庵堤での「ふり売りげんか」をモチーフとする、「喜六」と

「清八」が繰り広げる面白おかしいやりとりである。次に紹介する最初の導入（マクラ¹³⁾）の箇所は、現代のものでありいろいろとアレンジされてはいると思われるが、いきいきと往時の「のざきまいり」と「ふり売りげんか」を伝えてくれる。

五月の一日から、向こお十日間でございますが、いわゆるところの「野崎参り」というやつでございますねえ。たいへんに参詣人で賑わいをみせるわけでございますが、こらあもお今も昔も変わりがございません。ここにございました、われわれ同様という大阪のいたって呑気な連中でございますが、二人連れでございます「ええ時候になったんで、ひとつ野崎さんへご参詣しょ～やないか」まあちょ～どええピクニック代わりちゅうんですかねあ、ハイキングとしてええコースやったんでございますねえ。（中略）片町から京橋、さて徳庵堤にかかってまいりますというと、なんと申しましてもおお大勢の人でございます。いわゆるところの主従無礼講というやつ、ワァワァ言いながらやってまいります、その道中の陽お気なこと……♪（中略）。

（清八）昔から「日本の三参り」ちゅうて（喜六）「日本の三詣り」とは？（清八）京都は祇園さんの「おけら参り」四国は讃岐の国、金毘羅さんの「鞘橋の行き違い」そして、この「野崎参り」や。この三参りだけは、何ぼ口で喧嘩しても手えひとつ出さんちゅう、口だけの喧嘩や、口喧嘩や。その年の口喧嘩に勝ったらその年の運がええ、運定め口喧嘩やれちゅうねん（「上方落語メモ第三集」, <http://homepage3.nifty.com/rakugo/kamigata/rakug124.htm>）。

マクラからは、「のざきまいり」が「ピクニック代わり」の感覚であったこと、それと口喧嘩

のルールが分かる。「ピクニック代わり」については、ここでも「のざきまいり」が庶民にとっての娯楽であったことがうかがえる。また、舟に乗っている者と陸を歩いている者とが罵り合う喧嘩のルールは、「どんな激しい口調になっても、決して怒ってはならないという不文律は堅く守らされた」のであった（大東市史 1973：396）。このように、落語は「のざきまいり」の当時の情景をよく伝え、人々を「のざきまいり」へと誘ったのである。明治期の記事でもその野崎観音の賑わいが十分に伝わってくる。「殊に菜花の頃は黄金满地遠く数里に亘りて更に桂麝なり故を以つて四時の遊客絶ゆることなく山下には旅館割烹店多くして亦賽者に便なり」（大阪府編 1903：947）。

しかし昭和初期ごろは、少し「のざきまいり」が不振になったようである。そのことは、次のような回想から分かる。土地の俳人である西村白雲郷によれば、「村の親分衆が相談し、屋形船に替え野崎名物として、観音堂のすぐ南側にあった梅の木を『梅の久作屋敷』の梅とし、お染め久松ゆかりの地である物的証拠を創作した」（青木 1980：67）。また当時の歴史ガイドブックに「昔時毎年四月八日、灌佛の日に無縁今縁を修し、賽者群衆、殊に大阪の老若男女寝屋川堤を舟と陸とで互ひに悪言嘲弄屈せないのを誇りとして詣る者が多く、大阪附近の年中行事の一つとして賑かなものであつたが、今は五月八日に改つて賽者も比較的少なくなった」と記されている（大森編 1931：310-1）。更に、昭和9年に室戸台風により本堂が損傷したことも要因であると思われる。特に、落語「のざきまいり」の主題である舟という娯楽性の喪失の影響が大きかったと思われるが、この時期遊園地が鉄道会社によって各地に建設されたことも影響したと思われる。当時の遊園地は、松永久によると「基本的に遊園地は園全体の統一テーマがなく、公園的な整備をした空間の中に遊具が散在している形態」であり、「古くは電鉄会社の

沿線開発と沿線住民への社会還元から始まった。遊園地の歴史を遡ると電鉄会社を親会社とする遊園地にたどり着く」とされる

（「遊園地のこれまで」, <http://www.interneclub.ne.jp/MRIKAI/region/syu>）。当時の遊園地とは現在のような華やかさはなく、現在の公園といったようなイメージに近いであろうが、遊園地を鉄道会社により沿線に遊園地が続々と作られたことは、鉄道の利便性により娯楽性が分散し一時、野崎観音に足を運ぶことが少なくなってしまうと言えるだろう。

しかしこの不振は東海林太郎の「野崎小唄」で一変する。昭和10年9月末に発売されたレコードは爆発的な大ヒットとなり、人々を野崎観音に向かわせることになったからである。「野崎参りは 屋形船でまいろ どこを向いても 菜の花ざかり 粋な日傘にゃ 蝶々もとまる 呼んで見ようか 土手の人」。この野崎小唄を作詞したのは、当時寝屋川高校の教頭をしていた今中楓溪である。彼は、作詞について次のようなエピソードを残している。「野崎観音のウラ山に遊園地をつくるので、宣伝のためにひとつ小唄をつくって欲しかったという注文なんです。短歌ならできますが、小唄はどうも一とことわったのですが、とうとう押しつけられてしまいましたなァ」（牧村 1965：52）。この今中の話からは、遊園地（公園）を作ろうとしていたこと、小唄はそのPR用であったことがわかる。野崎観音の遊園地とは凡そ次のようなものであった。「長さ二メートルのつり橋や、三カ所の展望台もつくられ、西方はるかに広々とした河内平野のながめは美しい」（牧村 1965：102）。現在でも、つり橋や展望台はあるが、田園ではなくビルや住宅地が多く景色は一変してしまっている。こうして庶民の娯楽である歌謡のヒットによって人々を再び向かわせることになったのである。もちろん、この歌詞は過去の情景を歌っているが、遊園地あるいは行楽地として当時の庶民の娯楽を満足させたと思われる。このこと

は、「山を背にしたる西方の眺望が曠濶である。参拝者は春季に多く」（辰馬 1938：135）とあり、その他当時のガイドブックにも野崎観音の賑わいが記載されていることから伺うことができる¹⁴⁾。

4 戦後から現在の「のざきまいり」

戦後から現在の「のざきまいり」は、主にお寺の関係者であるAさんBさんのインタビューの中から構成し、考察を加えたいと思う。

Aさん¹⁵⁾は、80歳くらいで戦後昭和21年に野崎観音へ嫁いできた。Aさんのお話からは昭和20年代の「のざきまいり」の状況がわかる。Aさんが来た頃の野崎は、「野崎駅までほとんど何もない所で、人の声がここまで聞こえてきた。当時、家も10件ほどしかない農村」で「田んぼばかりで何もなかった。（人が多くなるのは）野崎参りくらいで、普段よそからお参りに来るということではなかった。5月8日（だった）か、5月は非常に賑わった。昭和9年の室戸台風で本堂もなく、更地になっていた¹⁶⁾。羅漢堂や阿弥陀堂もやられたが、江口の君堂はしっかりした造りだったので残っていた」。「野崎参りは5月に賑わったのは昔も同じだが、小学校が休みになるほどだった。参道にびっしりお店が並んでいた。君さんのお堂のところではろくろ首などの見せ物もあった」。

このお話にあるように「のざきまいり」は戦後でも賑わいが継続していた。そしてこの賑わいは、座談会の会話内容からも伺うことができる。そこでは汽車の他に「気動車」というものがあつたが、参拝者が多くて気動車が動かなかったこと。お参りが戦前から多く、戦後は「落ちていてから相当盛ん」になってきたことが述べられている。また、「のざきまいり」の人出が多い日は5月8日で、河内一帯が「昭和30年代までは五月八日は休日になりました」とも述べ

られている（まんだ編 1978：2, 3, 7）。このように戦後の混乱期が終わってから「のざきまいり」は賑わいを取り戻したと言える。

しかし野崎観音自体の復興は、本堂の再建以降と思われる。この本堂の再建には、一峰和尚の活躍なしには語ることができないであろう。復員してからの一峰和尚は、本堂再建のための托鉢を精力的に展開した。Aさんによると「昭和25年の移築された本堂は、東大阪、日下の大龍寺の観音堂であったのを譲り受けた。一峰和尚は歯医者との総代とともに、大龍寺の和尚とよく相談した。托鉢は国会議事堂にまで行き、通産相の高崎さんにはあんたの来るところやないと言われた。それでも後に、高崎さんは観音像の一つを本堂の上に、もう一体全く同じ形のもの澁川沿いの桂本に設置した」と言う。その苦労話は自著『アゴンの人々―仏弟子群像―』で述べられている。「戦後六年ほど、河内大阪一円を托鉢して歩いた」だけでなく「あらゆる町村を巡り、東京浅草の観音さんの本堂前まで托鉢」したのである（尾瀧 1991：233-4）。

そしてBさん¹⁷⁾のお話からは現在の状況が伺うことができる。Bさんは、50歳くらいの女性で一峰和尚とゆかりの深い人であり、「のざきまいり」のイベント計画者でもある。

「パンフレットにあるようなイベントは10数年位前から行うようになった。一日目は、主に音楽。それは音楽が好きだから。2日は特に決まっていなくて、3から5日は大道芸、5日は落語、6日は休みで、7、8日は子ども歌舞伎、素人歌舞伎などを主に行っている。イベントを多くしたのが、大東市が廃れてきたから。みんなに来てもらいたいし、広げたいと思って」。「一峰和尚は、『重要文化財もない、ただ来てよかったと思ってもらいたい。何を信仰しようとその人の心の救い。ただ人から金を取る宗教はだめ。（中略）』といつも言っていた」。「一峰和尚のやり方は無理だけれども、今のあり方に変えていっている。できるだけ、一峰和尚の意思をついでいきたい。ホッとできる癒しの場でありたい。次世代のためにも。若い人にもっと来てもらいたい」。

Bさんのお話からは、特に現代の人々に合うような娯楽性を提供していこうとする姿勢が伺われる。ここに「のざきまいり」が、環境の変化に応じて継続している大きな要因がある。その意味では「のざきまいり」の娯楽性という伝統が近世から一貫していると言えよう。ちなみに2005、6年の「のざきまいり」のイベント¹⁸⁾は次のようなものであった。

日	曜日	催し物	内 容
1	日	蓄音機で聴くのざきまいり	蓄音機で聴く SP 盤野崎小唄、クラシック、JAZZ, etc.
		人権展（～5日）。	
	月	野崎まいり寄席。	三代目、桂春團治、演目「野崎まいり」。
		のざきまいり奉納ライブ。	
2	月	奉納舞踊「のざきまいり」。	「のざきまいり」と「観音様」をテーマとした創作舞踊。
		昔なつかし大道芸（～5日）	仕事を持ちながら、「ガマの油売り」「チンドン屋」「南京玉すだれ」「手品」などの大道芸に取り組む、アマチュアのグループ。
	火	奉納蓄音機ライブ	蓄音機で聴く SP 盤の数々とのざきまいりジャズライブ、初代桂春團治「野崎詣り」、東海林太郎『野崎小唄』他。
		人権展（～5日）。	

3	火	人権ミニコンサート	
		昔なつかし大道芸（～6日）	南京たますだれ、蝦蟇の油売り、獅子舞、こま回し、他、大道芸数々。
4			
5	木	奉納落語会「のざきまいり」泉笑会。	今年で28年。「のざきまいり」に奉納落語を続けてきた社会人による落語。
	金	奉納落語会「のざきまいり」泉笑会。	
6	金	奉納落つくし歌舞伎 新版歌祭文「野崎村の場」（～7日）。	仕事をもちながら歌舞伎に親しむグループによる「お染久松」と子ども歌舞伎。
	土	吉純美派若柳、奉納舞踊	野崎小唄他。
		奉納落つくし歌舞伎 新版歌祭文「野崎村の場」（～7日）。	子ども歌舞伎。
7		花まつり（～9日）。	甘茶接待。
8	日	ようかび奉納ライブ	『独楽』による若さあふれる和楽器と民謡。
	月	ようかび奉納ライブ	独楽の和太鼓、津軽三味線、民謡。
10	月	無縁経法要	有縁、無縁すべてのものに対する感謝の法要。
	火		

* 上段は2005年、下段が2006年。

このように寺側が提供するイベント内容は、娯楽を提供するもので宗教性が顕著ではないが、この間宗教行事が行われている。2005年のパンフレットには、1日から10日の毎朝午前6時から「朝のお経」があり、2005年と2006年のパンフレットには、7日から9日まで「花まつり」、10日には「無縁経法要」が催されることが記されている。

現在も「のざきまいり」に来る大部分の人々は、不特定多数の人々である。従って、人々の「のざきまいり」への要求と常に寺側は合致させていかなければならないという相互関係が前提となっているように思われる。現在まではその関係が継続されているが、しかし参与観察の結果では「のざきまいり」に来る若者は少ない。年齢層としては中・高年層が友達同士で来ている人々が圧倒的に多く、次には小学生くらいまでの子どもを連れた家族連れであった¹⁹⁾。ちなみに、除夜の鐘つきは若者層がもっとも多くなり、「のざきまいり」の時と年齢層は逆転する。恐らく、イベントや娯楽性に対して人々のニ－

ズが多様性を持つからだと思われる。しかしそれでも、野崎観音の姿勢は今後を見据えている。「のざきまいり」の多くのイベントは、娯楽性を打ち出しており人々に関心を持たせようとしているからである。そしてこの姿勢の基本は、野崎観音自体が一峰和尚の遺志を継ぎ、「ただ来てよかったと思ってもらいたい」²⁰⁾と人々に思われる寺にしたいことにあると思われ、同時にこの姿勢は、野崎観音そのものの特色を現していると思われる。

以上から、昭和30年代くらいまで「のざきまいり」へ人々を向かわせたのは、寺側が不特定多数の人々に宗教的要求を提供し、それに庶民の娯楽性が合致したからだと言える。この主な娯楽は、江戸期では気軽な旅、浄瑠璃、歌舞伎、そして名物となった「ふり売りげんか」、明治から昭和30年代くらいまでは、落語「のざきまいり」、東海林太郎の「野崎小唄」である。つまり、庶民の娯楽に野崎観音が取り上げられることによって、流行の波となり「のざきまいり」へと人々が向かったのである。ただ、現在で大

きな流行の波が見られないのは、庶民の娯楽が多様化しているからに他ならない。またこのことは、不特定多数の人々を対象としている宗教と共通した問題でもある。それは若者への世代交代である。しかしながら、この世代交代は「のざきまいり」が不特定多数の人々を対象としているので流動的である。今後、若者を意識し多様性に合わせたイベントに切り替えていくのがあるだろうが、それでは寺の伝統がなくなるだろう。今後もこの意味での試行錯誤は続くと思われるが、しかし少なくとも寺側の姿勢がもっと人々に伝わって欲しいと思われる。

注

- 1) 「のざきまいり」は、「野崎まいり」などの表記もあるが、ここでは寺のパンフレットに従う。
- 2) また、安丸は「江戸時代の宗教史の一つの特色は、宗派としての仏教が葬祭を掌握する制度的な位置を与えられて普及したのに対して、そのような仏教では満たされることのできない民衆の宗教的願望に対応して、民俗宗教が多様に分化発展したことにある」と言う（安丸 1986：28-9）。寺院の縁日、開帳も基本的には民俗宗教であり、民衆の宗教的願望に他ならない。
- 3) 藤井学は、こうした縁日、開帳をもよおした寺院は中世的な大寺院が多かったとしている（藤井 1973：580）。しかし、江戸期に再興されたり信仰されたりした寺院は、基本的に寺禄がなく、寺壇制が施行されてからは檀家を獲得することが望めなかったので経営的に苦しかったのではないだろうか。
- 4) また鴻池は、「開帳の成功・不成功の鍵は、期間中の天候・開帳場所の条件・寺社の由緒格式・披露される宝物の評判、開帳に付随する見世物・芝居等の人気であったといえよう」と指摘している（鴻池 1987：39）。
- 5) 大和郡山郡山藩本多氏が野崎の領主であったことから、野崎観音は本多氏の菩提寺である東慶寺の末寺となっていた。本多氏が移封するにあたり一時は本寺をもたない「無本寺」となっていたが、無本寺が認められなくなったので同じく本寺を東慶寺としていた山城地藏院の末寺になった。この本末関係は寺格ではなく、幕府の寺院統制に対する便宜的なものであった（大東市史 1973：452）。
- 6) 檀家が少なかったことは、お寺の関係者からの聞き取りからも聴くことができた。なおこの

傾向は現在でも同じであることがインタビューから聞くことができた。「この寺は檀家が少ない『観光寺』で、特に檀家とそれ以外の人の区別は、特別にはしていない」（B和尚、C和尚、2005年3月23日インタビュー）。

- 7) この本多家の話は、A和尚からも聞くことができた（2005年3月20日インタビュー）。
- 8) 『寛文印知集』は、以下のHPを参照にした。
http://www.geocities.co.jp/SilkRoad-Desert/3914/yamato_kohriyama_1664.html
- 9) ただ郡山藩との関係は、郡山藩の領地が野崎村に引き続きあったので政治面では持続していた。
- 10) 大坂は江戸期を通じて、約30万人の人口でその内の約10パーセントが「町人」であった（渡邊 1993：16）。
- 11) その後の帝国鉄道の広告でも文面は同じである。
- 12) 鉄道開通によって舟が途絶えたことは他の文献にも見られる。例えば、昭和初期の雑誌に回顧談が記載されている。「野崎詣りの舟の杜絶へたのは明治時代で汽車が通るようになってから寂しくなった」（野崎詣り世話方 1931：110）。
- 13) 落語用語。噺の本題に入る前、時事ネタ等で会場を和ませるもの。定型化されたものも多い。
- 14) 例えば、東出清光編『大阪案内』、大阪参文社、1941など。
- 15) 2005年9月12日インタビュー。
- 16) 年表によると、昭和11年に本堂を解体とある。鉄道開通によって舟が途絶えたことは他の文献にも見られる。例えば、「野崎詣りの舟の杜絶へたのは明治時代で汽車が通るようになってから寂しくなった」（野崎詣り世話方 1931：110）。
- 17) 2005年10月30日インタビュー。
- 18) 2005、6年のパンフレットを元に作成。
- 19) 2005、6年の参与観察による。
- 20) この言葉は、A、B、C和尚、Bさんから聞かれた。また、次の文章も参考になる。「亡くなった先代の住職は『野崎観音は国宝も重要文化財もないけれど、ここに来たらほっとするなあ、また明日から頑張ろうと、誰もが自分の故郷だと思って来てくれるような寺でありたい』と願われていた」（川内 2006：19）。

参考・引用文献

- 青木茂夫 1980 「野崎参り」『大阪春秋』、42。
池上真由美 2002 『江戸庶民の信仰と行楽』、同成社。
井上正雄 1922 『大阪府全志』、大阪府全志発行所。

- 大阪府編 1903 『大阪府誌』, 大阪府。
大森盛太郎編 1931 『北河内群史蹟史話』, 大阪府北河内郡教育会。
尾瀧一峰 1991 『アゴンの人々ー仏弟子群像ー』, 青山社。
川内朋子 2006 「お寺めぐり 大阪府野崎観音(慈眼寺)」『禅の友』, 680, 曹洞宗宗務庁。
新修大阪市史 1989 新修大阪市史編纂委員会編『新修大阪市史 巻3』, 大阪市。
鴻池義一 1987 「大阪の開帳」大阪市史編纂所編『大阪の歴史』, 22。
大東市史 1973 大東市教育委員会編『大東市史』, 大東市。
1980 大東市教育委員会編『大東市史 近現代編』, 大東市。
辰馬六郎 1938 『近畿名蹟全書』, 金剛社。
圭室文雄 1977 「仏教の日常化」, 圭室文雄・宮田登編『庶民信仰の幻想』, 毎日新聞社。
野崎詣世話方 1931 「第七回行事 昔に復る野崎詣り」『上方』6。
藤井 学 1973 「近世仏教の特色」, 柏原裕泉・藤井学編『近世仏教の思想』, 岩波書店。
牧村史陽 1965 『お染め・久松』, 史陽選集刊行

会。

- まんだ編 1978 「座談 野崎観音」『まんだ』, 4。
宮家 準 1980 『増補 日本宗教の構造』, 慶応通信。
宮田 登 1993 『江戸の流行神』, ちくま学芸文庫。
1977 「民間宗教と現世利益」, 圭室文雄・宮田登編『庶民信仰の幻想』, 毎日新聞社。
森下伸也 1985 「生駒の宗教史 近世から現代まで」, 宗教社会学の会編『生駒の神々』, 創元社。
安丸良夫 1986 「総論ー歴史の中での葛藤と模索」, 同編『近代化と伝統』春秋社。
渡邊忠司 1993 『町人の都 大坂物語』, 中公新書。

資 料

- 秋里籬島『河内名所図会 翻刻版』, 柳原書店, 1975。
「女殺油地獄」, 宇野信夫他訳『近松門左衛門』(日本の古典19), 1972, 河出書房新社。
「新版歌祭文」, 『浄瑠璃集 下』(岩波日本古典文学大系52), 1959, 岩波書店。

慈眼寺（野崎観音年表）

西 暦	年号／天皇	出 来 事	備 考
752	天平勝宝 4／孝謙	行基，十一面観音を手彫りし安置。	東大寺開眼。
986－1011	寛和 2－寛弘 8／一条	この頃，中興の祖江口の君病氣治癒を喜び堂宇再興に尽力。	
1261	弘長元／亀山	権大僧都実慶，寺記を作成。	
1294	永仁 2／伏見	入蓮と優婆塞秦氏が九重の石塔を建立。	大東市指定文化財 2 号。
1562	永禄 5／正親町	畠山義豊，飯盛山城の支城野崎城を落城させる。	
1565	永禄 8／正親町	三好三人衆が松永久秀を飯盛山城に攻めた際，兵火にかかる。	松永久秀，將軍足利義輝を殺害。
1596－1623	慶長－元和／後陽成，後水尾	この頃，青嵩梵鷹和尚信州より入山し再興に着手。以降，曹洞宗。	
1639	寛永16／明正	本多政勝（忠勝系）大和小郡山藩主となる。本多氏の帰依を受ける。この頃，大和郡山長慶寺の末寺となる。	
1679	延宝 7／霊元	本多氏，陸奥国福島に転封。	三田浄久『河内鑑名所記』出版。
1682	天和 2／霊元	青嵩和尚，開祖一世とされる。野崎まいりはじまる。	ここから曹洞宗。
1685	貞享 2／霊元	山城井出，地藏院の末寺となる。	
1686	貞享 3／霊元	四世，嶺南『福聚山慈眼寺光割牒』を記し始める。嶺南和尚の頃，観音像，略縁起の木版版を参詣客に配布。観音百籤を始める。この頃より野崎まいりが盛んになる。	
1689	元禄 2／東山	大阪の両替商・平野屋五兵衛，本堂再建。	
1694	元禄 7／東山	五世，大真和尚入山。『福聚山慈眼寺光割牒』を完成。	柳沢吉保老中に准ず。
1704	宝永元／東山	大和川の付け替え。この頃から徳庵堤から陸路と舟路が並行することにより，名物「ふり売りげんか」始まる。	
1708	宝永 5 東山	大真和尚，梵鐘を铸造。この頃，寺容の整備ほぼ終了，厨子を新調。	梵鐘銘文に茨田郡牧方之住藤原家成の名あり。
1721	享保 6／中御門	7 月，近松門左衛門の『女殺油地獄』，竹本座で初演。	
1780	安永 9／光格	9 月，近松半二の『新版歌祭文』，竹本座で初演。	
1837	天保 8／仁孝	大塩平八郎の乱。俊棟和尚，乱の幹部柏岡富三郎を匿う。	一説には，茨田郡士。
1801	享和元		秋里籬島著，丹羽元国画『河内名所図会』出版。
1858	安政 5／孝明	十二世，庵禪和尚，書院を建立。	
1895	明治28	鉄道開設。この頃，5 月 1 日より10日の間野崎に仮停車場を設ける。	
1912	明治45	野崎駅常設。	
1934	昭和 9	室戸台風により，本堂が損傷。	
1935	昭和10	東海林太郎の「野崎小唄」大ヒット。	
1936	昭和11	本堂解体。時局柄，再建が許可されず。	
1945	昭和20	十九世，尾瀧一峰和尚，本堂再建のため河内一円，大阪市内，東京都内を托鉢に奔走。	
1950	昭和25	托鉢による浄財により東大阪市日下大龍寺の観音堂を譲り受ける。	
1951	昭和26	台風により裏山崩れる。羅漢堂，阿弥陀堂，役行者像，損傷。庭園埋没。	
1972	昭和47	豪雨により山崩れ。書院，新座敷喪失。	大東水害。

*『大東市史』，野崎観音パンフレット，梵鐘銘文，縁起文などから作成。